

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第692号 平成26年2月21日

## フロアー方式

先週、私立のI学院高等学校の卒業式に招かれ出席いたしました。

その学校は、通信教育を主体とする学校ですが、卒業式は非常に厳粛に行われ、卒業生の皆さんの式に臨む態度も清々しく、とても感激致しました。

しいて申し上げれば、国歌斉唱の際生徒の声が聞こえないという事については今更驚きませんが、校歌斉唱の際、生徒の皆さんの声に元気が感じられなかったのは少し残念です。生徒の皆さんには、自分が卒業する学校の校歌なのですから、もっと大きな声で堂々と歌って欲しかったなと思っています。

さて、卒業式といえば、国旗や国歌の扱いが何時も問題になります。

I学院高等学校は私立学校ですが、国旗は式典会場の「舞台壇上正面」に掲揚されていまして、国歌斉唱も行われています。「そんな事は当然」と思っている方は多いと思いますが、公立学校において、その当たり前の事が、いまだに通用していない学校があると事は悲しむべき事です。

国歌は、全員起立の上、教師のピアノ伴奏（学校によっては、生徒がブラスバンドで伴奏する所も有る様です）により、教師も生徒も声に出して歌うのが基本だと思いますが、残念ながら、伴奏はテープで流し、歌っているのはほんの一握りに方というケースが多いのが実態ではないでしょうか。

また、国旗の掲揚については、I学院高等学校の様に「舞台壇上正面」に掲揚する事が基本だと思いますが、現実には、これ以外の方法が取られている学校が少なくない様です。

国旗の掲揚については、今申し上げた「舞台壇上正面」の他に、舞台上に三脚で立てる「ステージ方式」というものと、国旗を舞台にさえ上げず床に三脚で立てるといふ「フロアー方式」というものがあります。

特に、卒業式や入学式の正常化が進む中で「フロアー方式」なるものは姿を消しているものと思っておりましたが、実は、いまだに「フロアー方式」がまかり通っている学校があると聞いて驚いています。

「舞台壇上正面」に掲揚する方式や「ステージ方式」と「フロアー方式」との大きな違いは、前者は国旗が式典に参加する方々全員に見えますが、後者は、後方に坐っている方々には殆ど見えないという事です。

それでは、式典主催者は何故、わざわざ国旗を「フローア方式」で掲示しようとするのでしょうか。それは恐らく、国旗は舞台壇上正面に掲揚したいとする校長と、それに反対し国旗を出来るだけ参加者の目に触れさせたくないとする組合との、いわば妥協の産物だろうと思います。

日本の国旗や国歌に対して様々な意見が有る事は事実です。しかし、国際化が進む中、子ども達が日本人としての自覚を持ち、国を愛する心を育てると共に、国際社会において尊敬され、信頼される日本人として成長していく上で、国旗や国歌に対する正しい認識と、それらを尊重する態度を身に付けて行く事は大変重要な事です。

現在、各学校においては、子ども達の発達段階に応じ、我が国の国旗や国歌の意義を理解させ、これを尊重する態度を育てると共に、諸外国の国旗や国歌も同様に尊重する態度が身に付く様指導が行われていますが、中でも卒業式や入学式は、国旗や国歌を学ぶ上で貴重な機会となっています。

学習指導要領では「入学式、卒業式等においては、国旗を掲揚すると共に国歌を斉唱するよう指導する」事が明示されていますが、それは何故なのでしょう。

子ども達が国旗や国歌を体と心で感じ取る上で、厳粛かつ清新な雰囲気の中で行われる入学式や卒業式は相応しい場だというのはいう迄も有りません。しかし、私には更に考えて置くべき事が有る様に思っています。それは、入学式や卒業式は、子供たちの成長過程における重要な「通過儀礼」だという事です。

昔は「元服」という儀式が有りました。この「元服」は、子供が一人前の大人と認められる重要な「通過儀礼」でした。これと同じ様に、入学式や卒業式は「通過儀礼」として、子ども達に昨日の自分と今日の自分とは違うのだと自覚させ、それに相応しい行動をとって行く様に促す絶好の機会なのではないでしょうか。

各学校が入学式や卒業式が厳粛に行われる様に準備するのは、学校として節目の行事というだけではなく、「通過儀礼」としての重要性を認識しているからだだと思います。一方、国旗の掲揚はもとより、紅白の幕も張らせず、修礼や卒業証書の授与といった儀式的な要素を無くせという主張は、入学式や卒業式の「通過儀礼」としての重要性を認識していないからだとは私には思えます。

もしも、色々面倒なので国旗は掲揚したくないのだが、教育委員会の指導も有るので「フローアに三脚で国旗を立て、それで国旗は適切に掲揚した事にしておこう」という学校があるとすれば、それは、公教育の担い手である筈の学校が自ら国旗を卑しめているに他ならず、それは即ち、自分の国をも卑しめているという事になりはしないでしょうか。

そして、私よりもっと恐れるのは、そうした姑息な対応をして憚らぬ大人達の姿を、子ども達はしっかりと見ているという事なのです。(塾頭：吉田 洋一)